



特 集  
辞書指導と語彙指導



◎実践紹介②——『ジーニアス英和辞典』

## 辞書とカードの活用で語彙力を

佐藤洋治



### ■はじめに

本の受け売りであるが、私は「外国語は一に単語、二に単語、三、四がなくて五に文法」との考えを持っており、ある程度の語彙力も文法力もないまま、communicativeな英語能力を育成するための「タスク」をさせたり、あるレベル以上の英文を読ませたりしてもあまり効果は上がらないと考えている。多読・速読はなおさらである。

私にとって辞書指導と語彙指導は同義である。外国語学習は辞書とその言語を使ったテキストでさせたいと思う。生徒たちが大学進学後、あるいは社会人になってからも自学自習できる「土台」のようなものが育ってくれたらと願っている。

それにつけても、辞書によるしる他の教材によるしる、また語彙だけに限らず英語学習全般において、生徒たちの吸収力を効率的に高める方法がないものかと私は常に考えている。予習や復習の状況をノートやプリント類で頻繁に点検するのは教師側の負担が大きすぎる。逆に負担になるからといって点検の回数を減らすと生徒たちが勉強しなくなるのではとの不安がある。教師側には全く都合のよい話であるけれども、辞書を読んで得た必要な情報を、生徒自身にその手を動かして書き取らせたい。かつその作業の結果を教師の負担を増やさずに確認したい。これを可能にする方法はないものだろうか。

### ■授業中の困難をきっかけに

中学時代に辞書を引いた経験のない生徒たちがほとんどであるにもかかわらず、本校英語科では

統一的な辞書指導や英語の学習法についてのオリエンテーションは行っていない。しかし私個人のレベルでは、文型や文脈を考えて辞書を引く大切さや、辞書を引く回数に比例して英語力が向上することを日頃から力説してきた。だから「最初は苦勞するかもしれないが、予習段階でじっくり辞書を引けば、自然に辞書の活用法を会得してくれるはず」などと甘い理想を持っていた。そんな時にあることが起きた。教科書で扱う *rest* の訳語のことであった。

*Genius English Course II* (旧版・大修館書店) の Lesson 8 には “They knew that if Shackleton stopped to **rest**, and fell asleep, he would freeze in the snow.”, Lesson 9 には “In Africa, when giraffes or other large animals eat acacia trees, the newly eaten leaves send out an SOS to the **rest** of the trees.”, そして Lesson 10 には “The shape of the *sho* is thought to resemble a phoenix **at rest** with its wings upright.” と、*rest* が 3 つの課に連続して登場する。

*rest* の訳語を求めて『ジーニアス英和辞典』にあたると、順に「休む」(動詞), 「…の残り」(名詞), 最後の *at rest* は成句扱いで「(1)静止して. (2)眠って. (3)安心して, 平静で. (4)永眠して.」とあり, generic な訳語は「休み」(名詞)で記述は明快である。しかし, 文脈を考えずに「残り」に対して「休息」との訳語を選び, 平然としている生徒が複数いたことがわかり, 愕然とした。予習の段階で, 文型や文脈に応じて辞書を引くよう指導していたにもかかわらず。この時点

で、理想としていた「予習での自発的な」辞書指導はあきらめて「今、ここで」の辞書指導へと切り替えざるをえなくなった。こうして教室で一斉に辞書を引かせる「手取り足取り」方式の辞書指導が始まった。もちろん、予習段階で辞書を引くことの大切さは言い続けた。

しかし、「手取り足取り」方式で語句を確認したにもかかわらず、定期試験の採点感覚からすると、期待していたほどの手応えがない。そこで、一定の規格を持ち、辞書の記載情報の浸透状況を確実にチェックできるものを探す必要に迫られた。さらにそれは教師側のチェック後に生徒たちがさほど無理なく復習に活用できるものでなければならなかった。

この時、単語カードを「思い出した」のである。個人的なことで恐縮だが、学生の頃、ある大学で教鞭をとっておられたアメリカ人の先生と知り合いになった。それ以前に日本語の学習経験が皆無にもかかわらず、先生は日本で日常生活に困らないレベルの日本語を話しておられた。先生から漢字を見事に使った暑中見舞いをいただいて驚いた。後日、失礼と思いながらも漢字の覚え方を尋ねると、カードを使い効果を上げておられるとのことであった。実際に、お手製の大判の「漢字カード」を見せていただいたこともある。先生は、漢字を表に、読み仮名を裏に書いて携行なさっていた。これは生徒たちの語彙＝辞書（活用）指導に使えるのではと考えたわけである。

#### ■教室での具体的な取り組み

以下に、カードを用いた辞書指導の実際について、事前・事後指導も交じえて紹介したい。

- ① 単語帳（ノート）ではなくあえてカードにするメリットは、覚えきれていない語句のカードだけを携行できることにあることを説明した。
- ② カードの大きさは、書き込ませたい辞書の情報量を考えて、大判を指定した。
- ③ 授業開始時に机の上に辞書とカードがあるか確

認させる。

- ④ 教科書各課の新出語句プリントを事前に配布して予習させ、教室で指名して生徒に答えさせる。間違えた場合は、私が文脈や文法の説明をする。例えば、上記の Lesson 8 では「stopped の後ろの to は to 不定詞だから rest は動詞で調べよう！」という具合に。その後、一斉に辞書を引かせ、間違えた生徒には訳語や例文を大きな声で読ませる。
- ⑤ 調べた語句は、一斉に辞書に蛍光ペンなどで下線を引かせる。
- ⑥ カードを用意させ、英語の語句を表面に、訳語や例文を裏面に書くよう指示を出す。発音記号の記入は必須とはしない。ただし、例えば、黙字を含む注意すべき単語（muscle, debt）などの場合は、発音記号も裏面に書かせる。また、当該語句に対する注意すべき同義語（表現）や反意語（表現）がある場合は私が板書し、裏面に書かせる。
- ⑦ 既に確認してある語句以外の語句や、教科書以外の補助教材等から拾った語句は、必要に応じて同じ指示を出し、カードに記入させる。
- ⑧ 語句の記入重要度は私の指示で、「必須語句」と「準必須語句」の2つに分けた。「準必須語句」のカード提出については、各生徒の力量と判断に任せた。結果的には、点検時に提出するカードの枚数が生徒によって違ってよいことを認めた。

#### ■おわりに

カードで提出させた語句の一部は校内定期試験でその定着度を確認できた。しかし、全てを網羅できる試験は未だ実施できておらず、これが今後の課題である。けれども、最大の効果は、当初こちらの指示に窮屈そうに反応していた生徒たちが、今ではこちらの指示なしで机上の辞書に手を伸ばしてくれるようになったことかもしれない。（さとう ようじ・青森県私立弘前学院聖愛中学・高等学校教諭）